石渡家訴訟

石渡家訴訟　天保７

p１

詫入申一札之事

一、貴殿方御請ニて召抱候一季之奉公人ミよ事
私共心得違ニて剃髪いたゝせ候処貴殿方より
何故ニ左様之始末ニ御座候哉殊之外六ケ敷
御懸り被成候段一言之申訳も無御座候ニ付
為御詫当年より三ケ年之内年季ニ相定
給金として当金壱両外ニ年二季之仕着せ
致し可申候御懸合申上候処御承知も無御座
直ニ永之暇差遣し可申候様被仰聞誠ニ当惑
仕候処各別之御自愛ニて以御詫一札ヲ御勘弁
被成下誠ニ忝仕合ニ奉存候且又御親父御死去ニ付
御悔申上候為御香典金百疋進上仕候尚又
貴殿よりミよ御宿元并ニ御組合中へも宜御取成
偏ニ奉願候右は御詫一札仍て如件

天保七申七月　　平兵衛　印

源次郎殿

石渡家訴訟　天保１３

p２

乍恐以書付奉申上候

武州池邉村一件相手同州荏田村
役人惣代名主金右衛門奉申上候右一件
御吟味中地所之儀ニ付難御決先般地改
として御出役論所御見分有之今般被　召出
御吟味被致候処右論所之儀は双方に無証拠
申候て□□迄之儀ニて難被遊御取用候得共当村ニて
御出役様御案内仕候場所は谷合并山片付
等ニて往古屋敷可有之場所ニ無之私共より

p３

申立候儀は別て難被遊御取用依ては
伐木代金相償訴訟方へ掛合熟談可仕旨
厚御利解被　仰聞奉恐入候右は。右は当村之儀往古
安国殿御料ニ被　仰付候節当村居廻り東西
南北池邉村外七ケ村地境紛敷不相成　＊石川、有馬、牛久保、市ヶ尾
様と之　御仁恵を以**土塚百拾八**御築立　大場、大棚、大棚下山田村
並木御植付相成候処近々欠損所出来

p４

宝暦八寅年中支配代官出役上置普請　＊1758
いたし右並木風折枯木等は（　　）
今般此度之出入ニは難御取用旨被仰聞候得共右□□
普請之節塚数相改被置候儀ニ御座候然ル処
今般御利解之趣ニては十相□候ては右塚之内八塚は
訴訟方へ被引取候被掠取候次第ニ相成□迄旧来進退
一躰故障無之相続罷在候処私共代ニ相成
他村江被引取候ては
安国殿御料支配仕候詮無御座奉恐入候儀ニ

p５・６

有之尤旧来とは申し池邉村ニても同村地所之

碇と引当候証拠等有之ハ無余儀事ニも
御座候へ共左候得は私共方ニは仮令取用無之
とも塚数印書帳も有□□□持被□池邉村ハ
寛文度川和村と之出入御裁許御絵図面　＊1661～1672
を以証拠ニ申立候得共私共村方は拘り候儀
無之右御絵図面ニは当村地境等之儀は
碇と御書載無御座然ルヲ右御絵図面は
今般証拠ニ申□候得共右ヲも御取用不相成趣
p7　候得共
左候へは
右古屋敷ニ不拘右八塚は空地之次第
ニ可相成左候得は□は両村とも進退不相成儀ニ
可有之処右塚上之松木相当之伐木代金
訴訟方へ無□償と之御利解奉受右代金
p8
相渡候様罷成候ては則地所迄も訴訟方
進退ニ相成左候ては此■居廻り八ケ村之内　＊自由に支配する意？
七ケ村之もの共も池邉村ヲ等簡当村へ出入
相仕掛近々袈相掛候様罷成村方難儀は
勿論上は
安国殿奉対　御廟江奉恐入候儀ニ御座候間
p9
何卒格別之　御仁恵を以前書之始末
御賢察為下此上
御憐愍之御沙汰満奉願上候以上
増上寺
安国殿御料并方丈領

武州都筑郡荏田村
弐人□代
名主
天保十三寅年二月　金右衛門
p10
御奉行所様

石渡家訴訟　文政2

p11
乍恐以書付奉願上候
武州都筑郡荏田村名主問屋年寄一同
奉申上候今般御鷹為御用内藤新宿
御出立ニて私村方并隣村大棚村江人馬
継立并御止宿被　仰付候御先触壱通
溝口村より人足を以継来候処奥書之儀は
大棚村始次ニ荏田村と御書記有之候ニ付
大棚村より継来候得は請取承知可仕様
人足之者へ相断大棚村始ニ持参可被旨
申断夫より人足中大棚村江持参被致候処
右村ニて一円取放不申其侭被差戻
溝口村ニて致方無之故内藤新宿御旅宿江
右村役人中ヲ以其段被　仰上候ニ付溝口村
p12
外三ケ村江御旅宿被　仰付全御通行之
御差支ニ罷成候段重々奉恐入候元来去々
丑年中御鷹御宿之儀ニ付私共村方大棚村

相手被取及出入候ニ付大棚村より継来候得は
順村御座候哉ニ付右村江可参様掛合之上
指図仕候得共御旅宿之儀は御先触之通用意
仕置候得共大棚村より夜明ケ候ても御先触
継来不申候間早々右村江罷越及承候得は
p13
其侭溝口村江右御書付差戻候段申聞候処
打驚是又早速溝口村江罷越相尋候処
最早内藤新宿江村役人を以当村ニて取扱
不申之段訴上可被申跡江罷越歎ケ敷
今更後悔至極仕此上右様不調法之段
其筋江被　仰立候ては私共儀如何様□
御咎メ可被仰付哉難計歎ケ敷奉存候間
何卒以　御慈悲御高免○之上明日御通行之　（左張り紙）
p14
○免被成下置候様御憐憫奉願上候然ル上は当往
御通行被遊候節御休泊は勿論人馬継立被仰付
次
第聊御差支ニ不相成様精々心掛ケ御用相勤
可申候此段御聞済被成下置候ハヽ村内一同相助り
重々難有仕合ニ奉存候以上
p16
（オリジナルの文章）
人馬手当仕置候間私共村方ニて継立□
下置候ハヽ村内一同相助り重々難有仕合
奉存候以上
増上寺安国殿料

武州都筑郡荏田村
名主　平右衛門
問屋　九右衛門
文政二卯年八月
年寄　七左衛門
御鷹匠
山川清右衛門様
前書之通荏田村役人共一同相糺候処
村方申立候通聊相違之儀不申上候間
何卒以　御慈悲今般不埒之段
御高免被下置候得は私共一同幾重ニも
難有仕合奉存候以上依之□印□以奉願上候以上
小野田三郎右衛門御代官所
p15
武州橘樹郡諏訪河原村　＊二子村の南に隣接の村。
名主代
年寄
権兵衛
同御代官所
同州同郡久地村
名主
年寄
善三郎
卯八月十八日　同御代官所
同州同郡二子村
＊1819

年寄
七郎左衛門

同御代官所
同州同郡溝口村
年寄
平右衛門
名主
七右衛門

石渡家訴訟　文政7」
p17
儀定一札之事

一、此度私共出入貴殿取扱ニ御立入被成下
双方掛合之上熟談内済之趣意
左之通
一、菊次郎并其外之者共同村観福寺
寺中地蔵尊六月十四日之夜待取締と
して同寺ニ被相頼候ニ付早速口論中
場所江欠付候て夫成ニ致置右清吉江
疵請候段全打擲不致筋ニ哉難
相決始末不行届候ニ付御検使之上
御尊判被相付奉恐入候且疵負人
清吉儀扱人方江引受薬養介抱
致農業渡世之差障り相成不申様
仕其上八五郎方へ差戻シ引取り
可申候尤済口証文之儀は江戸

御腰掛ニおひて双方口願書ニ順知御伺之上
相認メ可申候且右文面之内文□□
過不足之儀は双方共否申間敷
p18
為後日内済儀定一札仍て如件
牛久保村
願人
八五郎
右親類
丑松
同組頭
恵十郎
同名主
鉄五郎
荏田村
相手
菊次郎
親類
新治郎
組頭
善蔵
名主
久之輔
寺家村
扱人　四郎兵衛殿

石渡家訴訟
p19
乍恐以返答書奉申上候

武州都筑郡荏田村百姓長蔵弟菊次郎
奉申上候同州同郡牛久保村百姓訴訟人
大工八五郎より愚昧之私壱人ヲ目宛ニ相手取
打擲出入之旨申立其外数々品好事
工ミ目案相認蘇我豊後守様江先月中　＊勘定奉行：文政６～天保７
奉出訴候条則当月廿五日之○御差日御尊判
被相附拝見奉恐入候
右之段一々御答奉申上候発端六月
十四日之夜村方観福寺儀任先例
ｐ２０
境内地蔵祭礼附□り天神稲荷在寺之儀
序ニ相営ミ候所前祭八五郎門弟大工清吉
其節始末方々之儀目案表は三人落合同道
参詣帰宅之節意趣遺恨も無之所理不
尽打擲之旨品好申立候得共実事奉
申上候遺恨有無表裏之妄言大工清吉より
遺恨之含候儀は夢々不奉存驚入候其子
細風説承候所牛久保村磯次郎娘私村方
ｐ２１
若者共之内不儀之筋有之由世間之風聞
取止も無之儀を正立□□之含候段歎敷奉
奉存候虚実之儀は磯次郎并娘共被召出
御吟味被成下候ハヽ相分り可申候打擲之儀
其夜曇天燈籠打破り候上ハ如闇夜大勢
乱入難見正酒興之上同志打之様ニ相成私共
取支兼難義仕候何れニも
ｐ２２
中ヽ無謂観福寺境内燈籠数多打毀候
始末○仏神江敵対理不尽剛彊□致方乍恐遺恨之
門違哉奉存候乍去難差置無拠増上寺
代官所江観福寺并村役人より早速訴へ
御検使奉願双方御出役御検分之通り
乱暴狼藉之始末を増上寺代官所より
寺社　御奉行所ニ御届ケニ相成候観福寺江
ｐ２３
御理解之儀は仏事神事之営ミ寺院之
事故勘弁を以取納可然旨被仰聞承知
慎罷在候
一、訴訟人八五郎時分勝手能聊之儀を
厳敷打擲ニ逢数ケ所之疵抔と申立
候得共此儀は双方御出役御見分訴
答口證并双方医師より容躰書
ｐ２４
差上候通相違無御座候事
一、容躰書馴合を以認直シ偽之容
躰書抔と妄語を申立候段御上様を
欺き候儀深き存志も有之候哉数度
掛合仕候ても熟談調兼無是非今般
返答書奉差上候何卒以御慈悲其夜
大勢狼藉之者共逸々御糾明被成下
以来法外之儀不仕様偏ニ奉願上候以上

石渡家訴訟

p２５

右出入双方得と及掛合候処
相手荏田村之儀相州筋
矢倉沢通往還継場ニて
前々より御鷹匠様方相州筋
野先御用ニて御通之節

同村ニて御泊引受并人馬継立
仕来候処去々亥年四月中
去子年閏八月中御鷹方
御用御通之砌着湊候迚
両度迄大棚村江御泊御案内
仕右共同村ニて前々御泊等仕候
義無御座候処荏田村御案内
致候ニ付大棚下山田村大棚村
疑惑致候義ニて畢竟御先触
之義ハ荏田村御泊も有之候
義も大棚村江致御案内内々より
及出入候義ニ付以来御鷹方
御用通之節ハ大棚下山田村
大棚村江御泊等御案内致
間敷荏田村迄御先触有之
分ハ同村ニて引受御差支無之様
取計候筈廻文

＊文化１２年（1815）
＊文化１３年（1816）丙子年

p２６（裏面上端）

訴訟ニ付哉

（文化一四丁丑年 1817 に記されたもの）

（了）